

# 『エミール』における読者との対話

三 上 純 子

## 1. はじめに

ルソーは読者に理解されたいと強く願った作家である。そのような作家の姿勢が、最も顕著に見られるのは、晩年の自伝的作品であろう。自己弁明の書でもある『告白』では、「自分の魂を読者の眼に透明にして見せたい」<sup>1</sup>と述べ、さまざまなレトリックを駆使して、読者とのコミュニケーションを確立しようとする<sup>2</sup>。さらに、『告白』執筆後の朗読会で聴衆の沈黙に迎えられたルソーは、続く『ルソー、ジャン＝ジャックを裁く、対話』において、陰謀の首謀者たちに騙されている「フランス人」が、「ジャン＝ジャック」の人と作品の正しい理解者「ルソー」によって導かれ、自らの誤解を認め、正しい「ジャン＝ジャック」像の構築へと向かう過程を描くに至るのである。

ところで、読者による理解と賛同を求めるこのような姿勢は、ルソーの場合、人格と著作の道徳性が問題となる自伝的作品以前から、作品世界に明確に表現されている。本稿では、教育論『エミール』の語りに見られるレトリックの検討を通じて、読者に自己の思想を伝えるための作家の戦略を考察したい<sup>3</sup>。

## 2. 読者を説得する必要性

教育論と銘打たれた『エミール』は、「サヴォワの助任司祭の信仰告白」のような哲学的な断章をも含んだ作品であるが、「あなた方」"vous" "on" を主語とした文が全体に多用され、読者の語りの行為への参加を誘う構造をもって

いる。この「あなた方」と呼ばれる読者の具体的なイメージは後に見るとして、このように読者との対話を重視する必要はどこにあったのだろうか。

まず、指摘できるのは、ルソーが、文明の進歩を礼賛する時代の思想潮流の中で、処女作『学問芸術論』以来、同時代の社会の道徳的腐敗を厳しく批判する立場をとった思想家であったという事実である。

ルソーは『人間不平等起源論』で、人類の歴史を墮落としてとらえ、社会全体の救済の困難を示唆した後、『エミール』において、教育による個人の救済の問題へと向かう。そこで探求されたのは、墮落した社会の中にあっても、人間の本性（自然）を守り、道徳的であると同時に幸せに生きることのできる個人を育てる可能性であった。ルソーが思い描いた新しい人間は、「社会状態に生きる自然人」<sup>4</sup>とも呼ばれる存在であり、特定の社会秩序のもとで、然々の身分に向くように育てられた人間ではない。既存の社会の現実の外に、「抽象的な人間」（252）、理念型として追求されるしかないものであった。

したがって、ルソーは、この作品でも、『人間不平等起源論』同様、仮説的に論理を進めてゆくことになる。絶対王制下の、「コレージュ」や「世間で行われている教育」を、公共教育の不在や偽善的教育といった理由のもとに退け、「自然の教育」を提案するのである（251）。このような作家の立場と方法は、墮落した現実社会に暮らし、時代の教育を受け入れているであろう読者にとって分かりやすいものとは言えず、違和感や反発を招く恐れがあったと考えられる。

ルソーは、作品執筆のきっかけと狙い、読者にとっての作品の意義などを説明した、『エミール』の前書きで、次のように読者の反応を予測し、牽制している。「体系的な部分と呼んでいいもの、ここではそれは自然の歩みに他ならないのだが、この点がなによりも読者を当惑させるだろう。またこの点で、人は必ず私を攻撃するだろうが、おそらくそれは無理もあるまい。人は教育論を読んでいるのではなく、ひとりの幻想家の教育についての夢想を読んでいるような気がするだろう。だが、どうすればいいのか。私は他人の考えを書いているのではない。自分の考えを書いているのだ。私は他の人と同じようなものを見方をしない。すでにずっと前から私はそれを非難されている。しかし、他の

人の眼を自分に与えたり、他の人の考えを借りたりすることが私にできるだろうか。(・・・)たとえときに私が断定的な調子をとるとしても、それは読者に押しつけるためではない。考えた通りに語るためだ。(・・・)自分の考えを自由に述べるとしても、それがそのまま権威をもつとは私は考えていない。だからいつも私はそこに理由をつけ加えて、人がそれをよく検討できるようにし、私の考えが正しいかどうかを判断できるようにする。とはいえ、私は断固として自分の考えを守りとおそうとは思わないが、やはりそれを公にする義務があると考えている。というのも私が他の人と相反する見解をもっている格率はどうしてもいいことではないからだ。それらの格率は、その真偽を知ることが重要であり、人類の幸、不幸が分かれるところとなるからだ。」(242) こうして、読者は、作家の理論の正当性の判定者として、すなわち、語り手が語りの行為を通じて説得すべき対象として、テキストの中に位置づけられるのである。以後も、折にふれて、判断するのは読者だとルソーは強調するであろう(265, 548, 558, 768)。坂倉裕治氏も指摘しているように、『エミール』の語りの行為の根底には、作者から読者に提案された一種の契約関係<sup>5</sup>が存在するのである。

### 3. 呼びかけの対象

さて、社会の中で、既存の社会関係に影響されず子供を育てるという実験のために、ルソーのとった具体的な方法は、自分自身が教師に必要なあらゆる資質をもっていると仮定して、理想の教師の役割を引き受け、生まれたばかりの架空の生徒エミールを、成人するまで導いてゆくというものであった(264-265)。

ただし、草稿研究を行ったジマックは、エミールが初めて作品にあらわれるのは初稿では第三編であり、それ以前に書かれたテキストには加筆修正が施されていると述べている。ジマックは、ルソーが、語りの行為を通して作品中の教師と無意識のうちに同一化してゆき、エミールを創造するに至ったと推測している<sup>6</sup>。また、ルソー自身が言及しているように、自然の歩みに沿った教育を受けた子供は、次第に普通の子供とは違った存在となるので、一般的な例に

よっては理論の説明が難しくなるということも、エミールが必要とされた理由であろう(265)。

エミールの登場によって、教育論には小説の趣が加わり、作品中の「私」は、語り手(作者)とエミールの教師という二つの役割を手に入れることになる。教師ジャン=ジャックは実例の中でエミールを指導する登場人物となるのだが、そればかりではない。ルソーは、語りの中でも、この二つの役割を重ね合わせたり、行き来したりしている。プレイアッド版の校訂者ビュルジュランの指摘にもあるように<sup>7</sup>、ルソーは、二つの役割を演じられる「私」の正体の曖昧さを活用しながらテキストを構築しているように思われる。

読者を、呼びかけの対象という観点から見ると、特に子供の幼少期には、子供の身近で子育てに携わる人々、父親、母親、教師に対する直接的な呼びかけが多い。父親(243, 302)、母親(243, 245, 479, 701, 738)に対しては、世間の教育の悪習から離れて、まず自分の子供を自分で教育する必要を説いている。また、子供の教師は若くあるべきだと考えたルソーは、しばしば、若く情熱を持った教師に、具体的な忠告や指示を与えるのである(251, 333, 362, 433, 440)。しかしながら、こうした呼びかけや多くの実例の記述から、『エミール』が実践的な教育の手引き書ととらえられることについては、ルソーは強い不満を示している。『山からの手紙』の「第五の手紙」で、『エミール』について、「それは新しい教育体系なのであり、私はそのプランを賢明な人々の検討に委ねたのです。父母のための方法など私は考えてみたこともありません。私が時折、かなりありふれた比喻を用いて父母に語りかけているように見えるとしても、それは私の言うことをよりよく理解してもらうためか、ないしはより簡潔に自分の考えを表現するためなのです」<sup>8</sup>と述べているとおりである。したがって、子供を取り囲む父母や若い教師とは、理想の教師ジャン=ジャックに対応する、物語世界における読者の役割であり、読者を物語世界に引き込む、読者説得のための舞台装置とも言えるのである。

特定の人物への呼びかけに交じって、人間一般にたいする呼びかけが見られることも指摘しておかねばならない。第二編における「先見の明」による不幸や、「サヴォワの助任司祭の信仰告白」における、人間の内部に潜む悪を取り

上げた箇所では、ルソーは、人間一般に「きみ」"tu" と呼びかけて、説教者のように人間の不幸の由来を説き明かしている (308, 588)。読者は墮落した社会における、自らの存在のあり方を常に反省するように促されているのである。

#### 4. 読者との対立

さて、すでに見たように、ルソーが読者の反応としてまず予想していたのは、戸惑いや攻撃であった。『エミール』においては、「私」とは異なる考えをもつ読者の批判的な眼差しが絶えず意識されている。

語り手は、きわめて直接的に読者を誘導するために、二人称にたいする疑問文、命令法や直説法単純未来形を多用して読者との対話の場を形成してゆく。そして、ある時は「ということに注意するがいい ("remarquer")」(338)、「これまで言ってきたことがわかってもらえているとしたら、(・・・)が理解できるはずだ ("concevoir")」(480)、「しかし、まず考えていただきたい ("considérer")」(551)、「かどうか考えてみるがいい ("juger")」(643) というように認識行為に関わる動詞を用いて、読者に知的な理解を要請する。またある時は、「まあ、私のいうことを信じていただきたい ("croire")」(409)、「この機会における彼の行動を想像できない人がいるだろうか ("imaginer")」(788)、「読者よ、あなた方にも見えるのではなからうか ("voir")」(861) などの情動的な働きかけによって、読者の共感の獲得に努めるのである。

とはいえ、読者に自分の意見を押しつけはしないと断言した以上、読者には反論の自由がある。読者は、消極教育の方針にしばしば驚かされ、恐れをなして、語り手＝理想の教師に問いかけ "demander" (350)、反発し "répondre" (302) "objecter" (364, 554, 691)、非難を浴びせる "reprocher" (512) "accuser" (766)。それに対し、語り手の方も、読者の反論の機先を制して、自説の主張を進めようとする。頻繁に見られる、「あなた方は言うだろう」"vous me direz" (313, 486) "on me dira" (403, 429, 528) "direz-vous" (308, 320,

352, 364, 440, 445, 473, 508, 707) とその後が続く、「それは私も認めよう、しかし(・・・)」"j'en conviens, mais(...)" (320)、「あなた方は間違っている」"vous vous trompez" (370) "vous avez tort" (364, 401)、「それは全く逆だ」"c'est tout le contraire" (486)、「それが私のせいだろうか」"est-ce ma faute?" (325, 512, 777) といった反撃の表現に注意しよう。

さらに、エミールの登場の必要性にふれたテキストで見たように、作品の構造上、ルソー独自の、自然の歩みに則った消極教育が進むに従い、特別な教育を受けた「私の生徒」エミールと普通の教育を受けた「あなた方の生徒」との違いがますます大きくなってゆくことを忘れてはなるまい。語り手は、多くの実例の中で、「私の生徒」と「あなた方の生徒」を対比させて論じているが、太陽の運動と方角を学ぶ体験学習のエピソードでは、「本物のエミール」"véritable"ではなく、「世間並みのエミール」"un Emile vulgaire" を登場させたと述べている(459)<sup>9</sup>。なぜなら、本物のエミールは他の子供とあまりに違っていて読者の参考にならないからである。これほどに、私と読者を隔てる距離は大きいのである。

そこで、エミールの成長を振り返る節目節目で、語り手＝理想の教師はこの距離を確認せざるを得ない。第二編の終わりで、子供としての成熟期に達したエミールについて、ルソーは「この初期の教育の大きな不都合は、それが慧眼の士にしかわからないということ、そしてこれほど心を配って育てた子供も、凡俗な人の眼にはいたずらっ子としてしか見えないということだ」(424)と嘆いている。第四編では「私は自然を育ててゆくために、あなた方はそれを墮落させるために」「私の生徒」と「あなた方の生徒」には共通点がなくなると指摘し、「もうずっと前から、読者は私が幻想の国にいるのを見ている。そして私は読者が相変わらず偏見の国にいるのを見ている」(549)と両者の対立を強調するのである。さらに、宗教教育を終え、倫理的な存在基盤を獲得したエミールについては、ルソーは、「読者よ、私がどんなことをしてみても無駄だろう。私にはよくわかっている。あなたと私は、私のエミールを決して同じ特徴のもとに見ることはあるまい」(637)と述べて、読者を突き放し、両者の認識の違いを前に絶望のそぶりを見せている。

## 5. 読者との一体化

では、教育の進行に伴い、語り手と読者との間の距離は拡大してゆくばかりなのであろうか。必ずしもそうとばかりは言い切れまい。なぜならば、他方で、物語が進むにつれて、語り手＝教師と読者との関係は歴史をもち、両者の間には、一種の共犯関係とも呼べるものが育ってゆくからである。ルソーは、「思い出していただきたい」"Vous vous souvenez" (466) "Souvenez-vous" (348, 360, 435, 471, 534, 663)、「読者は思い出されるだろう」"Le lecteur se souviendra" (276) という頻出する表現によって、読者が語り手＝教師とすでに共有しているはずの知識に訴え、読者との特別な関係を確認しているように見える。とりわけ、エミールとソフィの出会いと結婚が主題となる第五編では、小説的な色彩が強くなる傾向もあってか、「私のやり方」(770) や「エミールの性格」(788)などをすでに知っている読者に、次に起こることの予測を委ねる信頼関係も生まれてくる。時には、語り手は、夢中になって恋物語を描きながら、「読者の寛容さ」に甘えている自分に気づくことさえある(824)。先に見たように、確かに、語り手は読者に命令することが多いが、"Voulez-vous(...)" + 命令文の形式(257, 261, 423, 733, 745, 764, 799)を用いて、押しつけがましさをやわらげる努力を忘れてはいない。時折見られる、「許していただきたい」"Pardonnez-moi" (323, 385) "Qu'on me permette" (499, 678)からもわかるように、語り手は読者への非難を繰り返しつつも、読者との間に友好的な関係を築こうとしているのである。

また、物語の展開とともに、対比的に使われている「私の生徒」と「あなた方の生徒」の他に「私たちの生徒」(406, 445)、「私たちのエミール」(479)という言い方が表れることも指摘しておきたい。これは、語りの行為を通じて、語り手＝教師と読者＝教師の間に、子供を育てるという共通目標に向けての連帯が生まれ、「私たち」"nous" "on" という呼称が表れることに対応している。例えば、エミールのうける宗教教育について自問する次の一節では、語り手が読者と相談しているような印象を与えないだろうか。「しかし、あらゆること

において世論のくびきを払いのけようとしている私たち、権威を一切認めまいとしている私たち、どこの国であろうと、私たちのエミールが自分自身で学べないことは何一つ彼に教えたいとは思っていない私たちは、どんな宗教の中で、彼を育てたものだろうか。」(558)

エミールの教育が、教師ジャン＝ジャックと読者＝教師の協同の仕事となっていることは、実例の中で、時に両者が連携して働いていることから明らかであろう。青年期に達したエミールが自分の意志で教師ジャン＝ジャックと「教育契約」<sup>10</sup>を結ぶ場面を見てみよう。まず、教師ジャン＝ジャックが、純潔の重要性についてエミールに語りかける(649)。次に読者＝教師が生徒に話すべき内容についての忠告が行われる(651)。続いて、エミールが、教師ジャン＝ジャックに、自らの情念から身を守れるよう教師の権威を持ち続けてほしいと願い出る(651)。エミールと教師ジャン＝ジャックとの間のこの教育契約の成立は、あなた方とあなた方の生徒との契約の成立に重ね合わされる。その結果、教師に服従する辛さを後悔しないように行なわれるエミールへの熟考の勧め(652)とエミールの従順さは彼の幸福のためにのみ使われるという教師の約束の言葉(653)は読者＝教師の台詞として与えられることになる。このように読者＝教師が教師ジャン＝ジャックの分身として働くことによって、教師ジャン＝ジャックの権威が確立するのである(653)。

先に引いたジマックは、エミール登場以前に書かれたテキストへのルソーの修正は不十分であり、テキストには矛盾も残ることを指摘しているが<sup>11</sup>、エミールの教育の成果として重要な意味を持つ上記の場面における二人の教師の協力は、読者＝教師にたいする教育の成果をも示す、語り手の巧妙な演出と解釈できるであろう<sup>12</sup>。

## 6. 読者の教育

このように、社会の中に生きる自然人エミールの教育の物語は、実は読者＝教師を教育する過程でもある。以下の例に見られるように、読者＝教師は常に



ルソーの提案する方法に従う限り、成功を約束されている。「したがって、初期の教育は純粹に消極的であるべきである。(・・・) あなたが何一つせず、何一つさせないでいられるなら、あなた方の生徒を右手と左手の区別もできないまま、12歳まで健康に丈夫に導いてゆけるなら、あなた方の授業の初めから、彼の悟性の眼は理性に向かってひらかれるだろう。何の偏見も、何の習性も持たない生徒は、あなた方の配慮の効果を妨げるものを何も持たないだろう。やがて、彼は、あなた方の手元で、人間のうちでこの上なく賢明なものになるだろう。何もしないことから始めて、あなた方はすばらしい教育を成し遂げたことになるだろう。」(323-324)<sup>13</sup>

他方で、読者＝教師が肝心なところでルソーの指示に背いた場合には、すべてが台無しだと警告される。例えば、技術の価値について、語り手＝教師の推奨する、有用性にもとづいた価値観ではなく、世間で行われているような希少性に価値をおく行動を読者＝教師が生徒の前で一度でもとるとすれば、「あなた方の努力にも関わらず、かれらは世間の人と同じように教育されることになるだろう。あなた方は14年間の苦労を無駄にしたことになるのだ」(457)と戒められる。また、青年が自分にふさわしい伴侶をえられる日まで純潔を守るよう導く際には、「それにしても、私の方法を捨てるようなことをするなら、私はもうあなた方に対して何の保証もできない」(639)と語り手＝教師は読者＝教師を脅迫している<sup>14</sup>。このように、成功と失敗のイメージを対比的に積み重ねてゆくことにより、ルソーは、読者＝教師を理想の教師ジャン＝ジャックの方法を内在化した存在に変えてゆこうとするのである。

読み手としての読者についても、ルソーは、読者に要請される資質を明らかにしている。読者に求められるのは、まず「理性的」であることである(265, 517)。そして、読者は注意深くなければならず(801)、優れた洞察力にも恵まれていなければならない(323, 424)。語り手の原理を個別に適用するのは読者の仕事である。「あらゆる種類の勉強についていちいち例を挙げて説明しなければならないと考えるほど私が読者を軽蔑しているとは、読者も思っていないだろう。」(451) 現実の読者、フォルメイの誤読を批判してつけ加えた注の中でも、ルソーは、「何もかも言ってやらなければならない人のために書い

ているのではないと、私はいくど明言していることだろう」(437(a))と述べている。このような読者に対する要求は、さらに押し進められると、言語による説明が不要になるほどの理解力への期待となって表れる。「気の毒な読者よ、それを言わなければならないとしたら、どうしてあなた方にそれが理解できるだろう」(350)や「読者よ、これ以上言わせないでいただきたい。私を理解できるような人なら、細かいことにも十分に私の規則を見いだせるだろう」(802)という表現には、読者との以心伝心的な意志疎通を望む語り手の姿勢が見て取れる。作者と読者の共同体は、『対話』で描かれた理想の国や、ジュリを中心としたクラランの家族に見られるような特権的なコミュニケーションへと向かってゆくのである。

## 7. むすび

最後に、語り手＝教師と読者との間の対話は深まりを見せ、両者の関係は前進したのかどうかを問わねばなるまい。ある時は対立関係を強調し、ある時は共犯関係や一体感に訴えながら行われた語りの行為は、両義性をはらんだまま終わるように思われる。

ルソーは、読者を挑発し、その自尊心をくすぐって、ルソー的な理想の世界の選ばれた住人になりたいという読者の欲望をかき立てようとする。読者の生きている現実世界を墮落した社会として断罪しつつ、ルソーは対話を通じて、個々の読者はその中に放置され絶望するべき存在ではない、エミールのような道徳的に自立した人間の幸福は、世界を見る目を変えることで手に入れることができる、心ある読者に呼びかけているのである。

すでに指摘してきたように、ルソーは、「偏見の国」の住人である読者にとっては、『エミール』は「幻想」或いは「夢想」にすぎないという認識を持っていた。「私は夢を夢として示し、目を覚ましている人にとって何か有益なものがそこにあるかどうかを探ることは、読者に委ねている。」(351)逆説的ではあるが、ルソーは、墮落した社会に生きる読者に覚醒を促し、夢想の世界に誘

おうとするのである。物語は螺旋的構造をもち、エミールが成人して、教師ジャン＝ジャックがエミールの生まれてくる子供の教師の監督を依頼されるところで終わるのであるが、読者への働きかけという観点にたてば、『エミール』の完結とは読者の改宗に他ならないと言えよう。

## 注

1. Jean-Jacques Rousseau, *Les Confessions, Œuvres complètes I*, Paris, Gallimard, 《Bibliothèque de la Pléiade》, 1959, p.175.  
以下ルソーの作品については、上記のルソー全集（1959-1995.全5巻、以下O.C.と略記）から引用する。訳文については白水社版の『ルソー全集』及び岩波文庫版を参照させていただいたうえ、論者の都合によって変更した部分もあることをお断わりしておく。
2. Jacques Voisine, "Le Dialogue avec le lecteur dans *Les Confessions*", dans *J.-J. Rousseau et son œuvre, problèmes et recherches*, Paris, Klincksieck, 1964, pp.23-31.を参照。
3. 『エミール』における読者の問題を扱った研究として、以下のものを参照した。特に坂倉氏の著作からは貴重な教示を得た。  
Rober J. Ellrich, *Rousseau and his reader: the rhetorical situation of the major works*, Chapel Hill, The university of North carolina press, 1969.  
Ronald Grimsley, "Rousseau and his reader: the technique of persuasion in *Emile*", dans *Rousseau after 200 years*, Cambridge, Cambridge university Press, 1982, pp.225-236.  
坂倉裕治、『ルソーの教育思想』、風間書房、1998。
4. *Emile ou de l'éducation*, O.C., IV, p.483. 以下、『エミール』のページ数は本文中に記す。
5. 坂倉裕治、前掲書、pp.15-16.
6. Peter D. Jimack, *La Genèse et la rédaction de l'Emile de J.-J. Rousseau*, Genève, Droz, 1960, p.181 sq.
7. *Emile ou de l'éducation*, O.C., IV, p.CXXVIII.
8. *Lettres écrites de la montagne*, O.C., III, p.783.  
なお、ルソーは1764年に出版業者フィリベール・クラメールに宛てた書簡の中でも、『エミール』は実際的な教育書ではなく、「人間は生来善良である」という原理についての哲学的な著作だと述べている。(Correspondance complète de Jean-Jacques Rousseau, éd R.A. Leigh, Genève, Institut et Musée Voltaire; Oxford, The Voltaire Foundation at the Taylor Institution, 1965-1998, XXI, N° 3564, p.248.)
9. 「世間並みのエミール」については、坂倉裕治、前掲書、p.7以下を参照。
10. Henri Coulet, "Le pacte pédagogique dans *Emile*", dans *Jean-Jacques Rousseau*, Neuchâtel, A la Baconnière, 1978, pp.69-93.
11. Peter D. Jimack, op.cit., p.185 sq.

12. 二人の教師の協力については、pp.432-433, 463-464, 663 も参照のこと。
13. 読者=教師の成功への誘導例としては、pp.320, 333-334, 362-363, 406, 510-511, 518, 520-522, 539-540, 542 などがある。
14. 読者=教師への厳しい警告の例としては、pp.260, 291, 301-302, 317, 327, 342, 490, 497, 663 などがある。

### 参考文献

- Coulet, Henri, "Le pacte pédagogique dans *Emile*", dans *Jean-Jacques Rousseau*, Neuchâtel, A la Baconnière, 1978, pp.69-93.
- Ellrich, Rober J., *Rousseau and his reader: the rhetorical situation of the major works*, Chapel Hill, The university of North carolina press, 1969.
- Grimsley, Ronald, "Rousseau and his reader: the technique of persuasion in *Emile*", dans *Rousseau after 200 years*, Cambridge, Cambridge university Press, 1982, pp.225-236.
- Jimack, Peter D., *La Genèse et la rédaction de l'Emile de J.-J. Rousseau*, Genève, Droz, 1960.
- Lecerle, Jean-Louis, *Rousseau et l'art du roman*, Genève, Slatkine reprints, 1979 (1968).
- Vargas, Yves, *Introduction à l'Emile de Rousseau*, Paris, Presses universitaires de France, 1995.
- Voisine, Jacques, "Le Dialogue avec le lecteur dans *Les Confessions*", dans *J.-J. Rousseau et son œuvre, problèmes et recherches*, Paris, Klincksieck, 1964, pp.23-31.
- 坂倉裕治、『ルソーの教育思想』、風間書房、1998。
- 吉岡知哉、『ジャン=ジャック・ルソー論』、東京大学出版会、1988。